

教育への情熱

福田 そもそも渡辺先生が「先生になりたい」とお思いになったきっかけは何ですか？

渡辺 小さい頃、私の親父の田舎から東京に出てきた学者の先生がいたんです。その家に遊びに行ったとき、「勉強は大事なんだぞ」「師範学校はなかなか入れないが、おまえ受けてみろ」と言われて、それで先生になりたいくなったんですよ。そのときの師範学校は、80人合格のところ、1000人以上応募者がくる時代でした。入ってからも、軍隊なみに規律がきびしくてね。

福田 へえー。

渡辺 ですから大変でしたよ。でも、先生になって、結果的によかったですと思います。僕のような性格には、先生が向いていたんじゃないかと思います。

安尾 そして、校長先生にまでなられて。先生は優秀な方ですから。

渡辺 優秀ということはないんですが、子どもが好きなんですよね。

小野 先生にとって、教職は本当に天職でいらっしゃるわけですね。教職は子どもが好きでないと、できない仕事ですから……。

渡辺 そういう点では確かにそうだと思います。

校長になっても、病気で欠勤の先生がいれば「私がいきましょう」と言って、喜んで代理で行くんです。教室に入ると、子どもたちとすぐに仲良くなってしまいます。子どもはね、そういうところはほんとうに正直なんです。中には「先生は怒ってばかりいていやだ」と担任の先生の文句を言う子もいて。ですから先生方からは敬遠されてしまったこともありました。

小野 管理職という枠をこえて、子どもとじかに接したいという先生のお気持ち、私もよくわかります。私も子どもといるのが大好きで、ついつい本部での仕事を忘れて授業に顔を出してしまうんですね。

良寛の「この里に てまりつきつつ 子どもらと あそぶ春日は 暮れずともよし」の歌ではありませんが、自分も楽しんでしまって、なかなか授業がおわらない。室長先生から注意されたこともありますよ。(笑)

福田 渡辺先生は、校長をお辞めになった後、聖徳大学短期大学で教鞭をとっていらっしゃいましたが、聖徳短大の方ではどのようなことを教えていらしたんですか？

渡辺 幼児の音楽についてです。幼児の音楽という領域で、ある程度理論的に、なおかつ具体的に学生に教えることを主眼としていました。理論的にはどうだとか、シンフォニーの作曲がいいとかね。幼稚園科の学生には、幼稚園の経験のある人が話さないと、実際に



安尾 一夫氏



福田 菊子氏

は役に立たないんですよ。

ですから私自身の経験にもとづいて、具体的に話すんです。「子どもはこうすると笑う、こうするとつまなくてそっぽをむいてしまう」とか。ですから重宝がられました。私自身も楽しかったし。

安尾 学芸大学の附属小学校の講師もなさっておいででしたね。

渡辺 ええ。小金井の附属小学校や幼稚園に勤務していました。

福田 先生の作曲した歌だけではなく、いろんな歌を教えられたんですか？

渡辺 もちろんです。私の曲を教えるときは、楽しいおもしろい曲ばかり教えますから、子どもたちは先生の歌がおもしろい、おもしろいと喜んで。ですから、ついこちらものってしまって、楽しい歌ばかり教えてしまうこともありました。

でも教師として音楽の基本的なこと、理論的なことはきちんと教えました。「きちんとすべきところはきちんとしなくてはいけない」と、うるさいくらい言いましたね。お遊び的な要素の強い歌を教えるとき、その楽しさだけに目が向いて、ともすると本来の目的が見失われがちなんです。基本的なこと、たとえば、リズムをしっかりとるとか、音程をきちんととるとか、そういった目的を忘れて、単なるお遊びに使われることが多くて……。

小野 なるほど。まず基本があって、その上での遊びでないと、本末転倒であると。

渡辺 基本的にはそうなんです。音楽の基礎を教えるのが、幼稚園・小学校の音楽教育の本来の目的です。それを達成するための教材として歌があるわけです。ところが、単なるお遊びだけに使われてしまうことがある。まあ、音楽が好きになるきっかけとなるなら、それはそれでいいとも思いますがね。